特 71
688

301271-001-2

特71－688

わか草

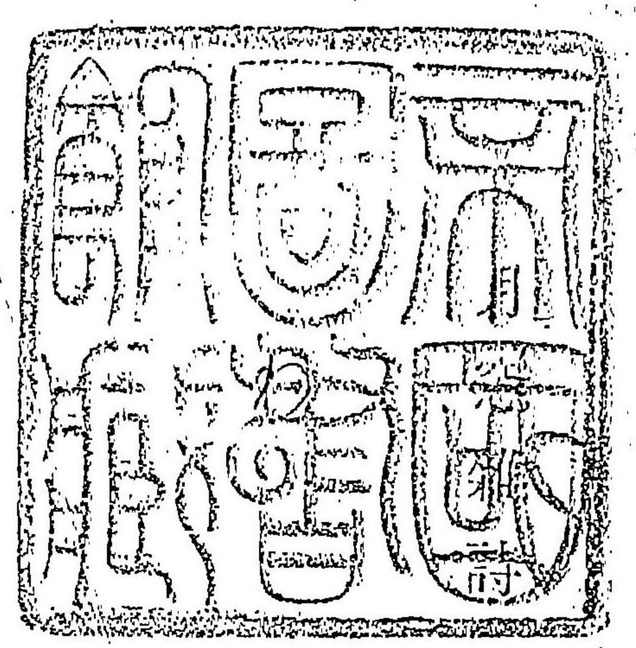
馬場直美

M40. 8

DAG－0001

特 71
688

韓補忠の
草稿



第一編

草加

馬場峰月作

明治
40 8 19
内務

特71
688

月窓雜詩　自序

春月の曉、秋月の晩、豈にや思を千々に碎かしむるは何か月に如くものあらむ

我は是れ宇宙に生を寄する一价夫朝に出でて營々人非紛糾の巷に奔馳し、夕に歸りて蕭窓の下この月に對す、仰げば如々たる素影自然の大を語らむとするが如く、顧れば淵輝孤燈を壓して人生の小を憐むに似、眼た萬感の湧くものなくんばあらず

然れども我哲人にあらず悠遠の想以て自然を

閲くべからず、我輩等にあらず、流血の餘以て人生を舒ぶるに由なし、自然、人生、我關せず、我は滯々歌はむのみ、歌は嘲嘲、吃吃間より聞を爲し難し、只だ皎月の下、破窓の裡、獨り歌ひ獨り嘆し以て自ら思を遣らむのみ

明治四十年七月下浣

峰月散

若草例言

一、若草は月窓雜詩の第一編なり、收むる所八首の劇路紅葉落の二篇となす

一、八首の劇路は、俊寛の僧有王丸の邪を叙べたるものにして、平家物語に據り源平盛衰記、戯曲平家女護島、藤山俊寛及び鬼界ヶ島物語を參考せり

一、紅葉落は戊辰の役、飯盛山に殺死したる會津の少年白虎隊の事を叙したるものを主として某老翁の談話及び佐藤氏の會津史に據り

御は柴氏能人之存過、川尻藩會津藩伊達伊予間、紀州藩、白虎隊、新撰組、白虎隊、中間瀬源一郎、會津藩、陸軍部に飯盛山現存の碑文錦映寺を以て溯考せり

一、過稿以來匿かに一年、未だ推敲を盡すに道あらず、完はゝ之を後日に期せんとす

一、後行に際し特に助力を與へられたる岡川青楓、大柳孤山の兩畏友に謝す

明治四十年七月下浣

作者識

有王島下りの事（平家物語抜抄）

去程に鬼界ヶ島の流人共、二人は被召返て都へ上りぬ、今一人被残て、爰かゝりし島の島守と被り にけるこそ力なけれ、俄都の方より不便にして被召仕ける童あり、名を有王とぞ申しける 鬼界ヶ島の流人共、今日既に都へ上ると聞えしかば、有王島羽まで行向て見けれ共、我が主は見え給はず、如何にと問へば其は奥深しとて、一人島に残されぬと聞て、心憂なども愚なり、常は六波羅邊に千て聞きけれども、何故況可有共、聞出

ざりければ僧都の御娘の忍て坐ける所へ參て御文給て參り候はんと申ければ姫御前不斜に悦躰て書てぞ給てける、暇な請共、よも赦さじと て父にも母にも不知(シラセス)三月の末に都を立て多く の波路を凌つゝ彼の島へ渡りて見るに都にて 幽に傳へ聞しは、事の數ならず(中略)或朝磯の方 より蜻蛉なんどの如く漕寄たる者ふるほひ 出來たり、若し加様の者にても我主の御行衛や 知たると物申さうと云へば何事と答ふ、是に都 より被流給たりし法勝寺の執行俊寛僧都と申

す人や在すと問ふに、童こそ見忘れたれども僧 都は爭か忘給ふべきなれば是こそそれよと宣 も敢ず倒臥す、さてこそ我主の御行衛とは知て けれ(中略)有王渡て廿三日と申すに僧都庵の中 にて遂に終り給ひぬ、歳三十七とぞ聞えし、有王 惜く存へて御菩提を吊ひ進すべしとて藻鹽の 烟と成し奉り茶毘事終ぬれば白骨を拾ひ首に 懸け又商人船の便にて九國の地にぞ著きにけ る。

白虎隊顛末（續新出料）

明治戊辰會津藩ノ守ヲ失フヤ、藩、日向、内藤原兄弟ヲシテ白虎隊ヲ率ヒテ戸ノ口原ニ進撃セシム、利アラズ、十六士之ニ死ス、是日ノ出陣ハ皆出デテ四境ヲ掠ス、乃チ士人ノ子弟年十五ヨリ十七ニ至ル者ヲ撰ビ、隊組シテ白虎隊トイフ、日々戦法ヲ練ル幾モナクシテ能ク熟シ地カニ壮者ニ及ビ、敢ヲ敢ナシ或ハ敗ヲナシ唯城命ニ徴フ、而カモ敵ヲ敵ヒズ、内藤ハ走リ遂リ兄吉亦七人ト逃レ走リ路ヲ失ヒテ彷徨ニ

陥リ敵国ニシテ始メテ羽黒山東光寺ニ逃スルヲ得タリ、十六士已ニ内藤等ト相失ヒ、黒夜山谷ヲ跋渉シテ飯盛山ニ至レバ天明ケタリ、敵ハ已ニ湯川坂ニ在リ尾隊悲ヲ怒ニシテ驟丸雨ノ如ク下ル、山ニ吉洞アリ即チ入リテ之ヲ避ク、少頃ニシテ出デテ山ニ登リ城ヲ眺スレバ烟焔天ニ漲リ敵陣地ヲ張ルハ、十六士相顧テ国ク敵已ニ城ニ入リ皆飢困シテ復タ戦フベカラズ此際ニ停シメウレンヨリハ一死以テ隅ニ報センニハ如カズト、乃チ眺ヤ府城ヲ拝シテ曰ク国

が事畢レリト環坐シテ暗ヲ屠リ咽ヲ貫キ以テ死ス實ニ八月廿三日ナリ(中略)後數日ニシテ落士印出某ノ妻山口氏、其子ノ存亡ヲ知ラズ徧ク原隰ヲ搜リ偶々飯盛山ニ至ル、死屍相枕シ碧血地ニ溢ルヽヲ見、謂ヘラク晉兒モ亦此ニ死セリト屍ヲ檢スレドモ有ル事ナシ、一屍アリ年其子ト相若シ氣息奄々トシテ猶ホ殊セズ、乃チ負テ歸リ病院ニ投シテ遂ニ癒ユルヲ得タリ、即チ飯沼貞吉ナリ(原漢文關場忠武)

目次

八重の潮路

第一章 花吹雪 …… 一頁
第二章 桜枕 …… 十三頁
第三章 磯山 …… 二十三頁
第四章 夢現 …… 三十二頁
第五章 阿屋 …… 四十八頁
第六章 潮畑 …… 六十三頁

紅葉落

第一章 吉蔵途 …… 八十五頁
第二章 蔵戰 …… 百一頁
第三章 殉 …… 百十六頁
第四章 追懷 …… 百三十二頁

月窓雜詩

若草

八重の潮路

第一章　花吹雪

柳櫻をこき交ぜし
都の春の日は暮れて
花より歸る公達の
駒の嘶薄れ行き、

馬場峰月作

車連ねて聖僧等のいづち行くらむ朱雀路を夕月霞む九重の宮居の方へ軋らする。

六波羅あたり行く人の呻く聞けば己がじじ『后の宮の御禱に世の罪人は赦されて

皆放たるゝ昨日今日、三年都に謫はれし鬼界ケ島の流人等も明日は都に歸るとか』。

『なに、なに、三年謫はれし鬼界ケ島の流人等の明日は都に歸るとや、こは、抑も夢にあらざるか』、

勇み喜ぶ若人の
『實にこそ神は在しけれ
明日は早朝我が君に
見えむ事の嬉しさよ』。

都を爽曉立ちいでて
急ぐや鳥羽の作道、
行き交ふ人は多けれど
似し俤の人も無き、

など我が君は未だ見えぬ
覺束なくも思ひつゝ
巷に聞けばこはいかに
こはそも、いかにそもいかに。

同じく歸る雁とても
後れ先だつ世なればか
彼の少將と判官と
二人は召されぬ歸りしも

唯鹿ケ谷の僧都のみ
犯せる罪の深ければ
一人島には遺されつゝ、』
聞く若人は泣き伏せる。

道行く人は恤りて
仔細を問へば若人は
『我有王と呼べる者
年來仕ふる僧都こそ

今日は都に歸るぞと
聞き知る儘に此所までは
迎ひ來しかど其人は
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ』。

涙を止め有王は
『あな、我乍らおぞかりき
たとへ鬼住む島とても
行くには道も有べきに

左なり、これより出で立ちて
奈良の都に忍びます
姫君にしも謀らばや』
思ひ定めて立上る。

青丹吉奈良の小坂を超え來れば
古りし都の八重櫻
しづ心なく袖に散る、
誰が住む宿ぞ蓬生の

傾く軒に苔むして
唯松風の音長き、
有王やがて音なへば
幽かに應ふ人の聲。

待つ間程なく立ち出づる
春未だ淺き手弱女は
『こは有王か如何にして』
涙を止め有王は

『姫には未だ知られねど
同じき島の島守の
二人は既に歸りしも
父君許り彼の島に』。

『そは又、いかに、いかなれば』、
『苍に聞けば君のみは
犯せる罪も深しとて
此瀬に漏れしなりとかや』、

『あはれ無情き相國の
何時召し返す心ぞも
有王、汝は父上の
歸りまする日を聞かざるか』。

『六波羅あたりさすらひて
心を盡し探りしも
其日は何時ときゝもせず、
只この上は彼の島に

御行方尋ね御心を
慰めまつる外ぞ無き、
鬼住む島も何かあらむ
御文を賜へ、いざとくも』。

涙を拂ふ手もたゆく
認め了り彼の姫は
『佗しき島に一人住む
其父上は如何許り

汝が訪ひ行かば嬉しからむ、
波風荒き海の上、
必ず安く』『姫君も』、
門にはいとど花吹雪。

第二章　楫枕

都をば霞の衣たち別れ
先づ踏み初むる播磨路や
須磨の關屋は花散りて

春を止むる人もなく、
明石の松の曙に
ほのぼの見ゆる眞帆片帆
若し心なき旅ならば
少時杖をも止めましを。

網を晒せる浦人に
笠傾けて有王は
『我は薩摩に下る者

何の津より渡るべき』、
『薩摩に渡る、阿子一人
こはけうとうな、其船は
今漕ぎ出でつ、あれ見よや
帆は揚げられぬ、あの船ぞ』。
聲を限りに呼びとめて
辛くも苫に身を寄せつ
『これは都の邊より

逢ふ人ありて彼の國に
下るものなれ、願くは
同じく具して給はれよ』、
舷洗ふ浪の音
苫の上吹く風の聲。
苫屋の裡はほの暗く
荒夫數多集ひ居て
笑ひのゝしり聲々に

『都に見ざる珍物は
海の上にもいと多し
潮吹く鯨』、『海法師』、
『又歴氣樓』、『不知火も
都に見しか若人よ』。
搖めく聲に日は落ちて
夕風いとど吹き荒み
弦を離れし矢の如く

船は疾くも馳るなり、
苫屋を出でて見渡せば
陸は雲路と隔りて
女波男波の潮煙
立ち連りて我を逐ふ。

仰げば星の数々は
雲の絶間に閃きて
帆を吹く風も音凄し、

あはれ彼の星澄むほとり
母は如何にか思すらむ、
あはれこの風吹く方の
何處に君は在すらむ
翼もあらば……。

見れど、見れど、目も遮らぬ海の上に
幾夜寢覺の楫枕
重ね重ねて薩摩潟、

こゝより更に商人の船を求めて彼の島に向へば迎ふ五月南風船の進みも捗らで終日見るや雲の峰。

蕃夷に通ふ商人は皆海賊かとりくに『料を償へ、やよ童』、

『船の料には足らずとも汝が持つ黄金悉く船玉神に捧ぐべし』、『稜威畏き大神の其御怒を受けぬ間に』。

有王やがて面をあげ『曩に薩摩の泊にて財は人に掠められ

今はいぶせき空蟬の
ひとへに救し給はれよ』、
『然らば蟬のからごろも
暫時借るべし夏立ちて
都人には暑かれば』。

渡るに難き世の海と
人言ひけむも宜なりや
憂き日も積めばいつしかに

今は島にも近づきつ、
遠く望めば雲罩めて
鴉の浮巣と見えけるは
巖峻しく松古りて
仰ぐも高き磯の山。

第三章　磯山

鬼住む島はこれかそも
磯邊に立ちて見渡せば

沙路遠く連りて
風徒らに草を吹き、
怪しき鳥の飛びかひて
只聞くものは濤の音、
人ありとしも見えざるに
君は何處に在すらむ。

心措きつゝ行き行けど
烟を揚ぐる里もなし

又畑もなし、家も見ず
君は何處に在すらむ
如何に佗しく思すらむ
遥に見ゆる影二つ
鬼か人かは分かねども
聲を限りに近きつ。

近き見れば島人の
怪しき言を交へつゝ

訝しげにぞ立ち居たる、

『これに流され在す都の寺の巡行なる俊寛僧都の御行方を知らせ給はゞ教えてよ』、

『……』。

うるまの島の人とても人の言葉は知るものを

『知らせ給はゞ教えてよ』、

一人は僅に點頭て

『三人ありしが一人あり』、

『おゝ其一人の御行方を』、

『知らず其人今は無じ』、

『なに其人は今亡しと』。

假令亡き數に入るとても

など亡骸の無かるべき

小島のうちの何かあらむ
草を、分けても尋ね見む、
山は眺めに便よし
先づ分け入らむ彼の峰に
巖を攀ぢつ、又頗けつ
只一線に馳せ登る。

笠をかざして眺むれど
飛び交ふ鳥の影許り、

聲を限りに名を呼べど
谷の谺のひゞきのみ、
夕日は波の上に落ち
風涼しくも松を吹く、
あはれ疲れぬ、いざさらば
袖かたしかむ巖蔭。

松の嵐に思ひ寐の
夢破られて見廻せば

四邊は元の島の中、
今我が君に從ひて
嵯峨野の奥の櫻狩
宴の筵月さして
姫の奏づる玉琴と
聞きしは松の音なりしか。
峰に攀ぢ又谷に下り
雲を穿ちつ霧分けつ

山は隈なく覓めしも
其俤の人もなし、
今は濱邊を志し
下れば磯の夕千鳥
集く鷗の跡ならで
又問ひ寄らむ影も無き。
都を出でて幾月を
潮路の風に梳り

島を巡りて又幾日
降る五月雨に打ちそぼれ
尋ね尋ねし御行方は
又尋ねむに術もなし
あゝ我今は如何にせむ
見かへる山は夕霞。

第四章　夢現、

波の飛深の散る邊り

一日朝をさらへば
こはそも如何に、潮風に
枯れうつろひし磯馴木の
動くと見ゆる影はそも
只目も離れで見てしあれば
こは又、如何に其影は
此方をさして近きぬ。
風のまに〳〵よろめきつ

歩むともなく、近けば
之はも人か……
骨は現れ肉は落ち
纏ひし襤褸は名のみにて
肌は赭く風に晒れ
夕を待たぬ蜻蛉の
露に渇ける如くなる。

もとは法師の類にや

髪虚様に生ひ上り
吹く潮風に亂れしは
荆棘被ぐに異ならず、
かくても命惜しとにや、
畫餉の糧か魚一つ
夕餉の料か貝二つ
何處に得てか手に持てる。
乞食は世にも多けれど

我未だかゝる者は見ず
實にあさましや世の外の
離れ小島に迷ひ來て
尋ぬる君に逢ひもせず
思ひもかけず却に
佛の說きし餓鬼道を
今目のあたり見えむとは。
深山に住めば自ら

峰の猿も友なれや
かゝる者しも我君の
行方を若しや知りもせめ
『物尋ねてむ』、『何事ぞ』
『都方より此島に
流され在す貴人の
僧都の御行方知りつるか』。
乞食は暫時目を睜り

『誰ぞ、誰ぞ、汝は有王か』、
『こは訝かしや誰なれば』、
『我こそ僧都』云ひ敢へず
仆れ伏したり渚邊に
『こは、こは君か、我君か
見忘れまつるうたてさよ』、
又立ち噪ぐ波の音。
僧都は息も苦しげに

『やよ、有王よ、有王よ
實に、實に……』やがて絶え入れば
膝に掻載せ有王は
『八重の波路を漕ぎ分けて
幾度しぼる湖衣
かわきも敢へぬ我袖を
又濡らせとやつれなしや』、
『つれなき君やなぞもかく

憂見せ給ふ我君や』、
抱き歎けばやゝありて
僧都は僅に目を開き
『夢かあらぬか、人の聲』、
『こは現、なり我君よ』、
『おゝ有王や、現よな』、
『御心強く』、波の音。

波の間に〳〵群鳥の

友呼ぶ聲ぞ頻りなる、
僧都は扶け起されつ
『幼き汝の健氣にも
人だに住まぬ此島を
訪ひ來し心の嬉しさよ
遙けき道の旅枕
病さへも無かりしか』。
夕を知らず衰へし

人の言葉か、有王は
迫る涙を抑へつゝ
『都を春と立別れ
海路を幾日ふる雨に
旅の衣は寒れしも
神の守か恙なく
今かく君に巡り會ひつ』。
都の夢も荒波の

寄せては破る朝の聲、
戀しき空を眺めては
思ひを焦す夕の色、
音づる風も照る月も
昔を語る友ならず
只佗び捨てし島守の
心は今や如何ならむ。
僧都は世にも嬉しげに

『朝と云はず夕と云はず
思ひは馳せてひたふるに
都の空にさまよへば
月無き夜半の松風を
我にさゝめく聲と聞き
又蹈む影を都人の
俤と見し幾十度』、

『今は心も痿え果てゝ

現か、夢か、知り分かず
有王、汝の訪ひ來しも
夢かと思ふ夢ならば
覺めてむ後を如何にせむ』、
『御心弱き我君や
こは現なり、夢ならず
夢ならざれば覺めもせじ』。

僧都は頭を回らして

其來し方を顧みつ
『此所は波散る汀にて
語るも、聞くも詰されず
彼の村松の邊りこそ
日來住み來し家居なれ
住めば都の我家に
いざ將て行かむ』、立ち上る。
彼の島もなく、家もなく

只打ち續く沙原
僧都を肩に有王は
かくも窶れし君の身の
尚家居とは不審と
心の中に思ひつゝも
導く儘に行き行けば
やがて着きけり其門に。

一叢立てる老松に
夕風輕く吹くあたり、
後に近き磯山に
月影淡くさすほとり、
半ばは朽ちし竹柱
疎に載せし松の屋根、
名のみは美しき四阿の
見るもいぶせき庵あり

僧都は指して『これこそは
我が結びにし庵ぞ』、
見るや有王伏し沈み
『あはれあさましく、在りし世は
司尊く家富みて
出づれば匂ふ御車に
入れば樂しき御宴に
春日短く啣ちしを』、

『あゝ如何なれば目のあたり
憂目をかくは見給ふや』、
僧都は淋しく笑みつゝも
『皆夢の世の報のみ、
さあれ、思へば今も尚
夢に遙ふ如くなり、
今朝はしなくも見し夢の
未だ覺めざるに非るか』。

『夢ぞと思す御心の
實に理やかくてしも
三年を荒ぶ波風に
存らへ給ふ不思議さよ』、
少時あきれし有王の
松吹く風に見かへれば
月は靜かに冴え行きて
隈なく照す庵の中。

僧都は月に背きつゝ

『曩に都の迎として

二人の者の歸る時

既に淵瀬に行くべきに

由なき人の一言を

心に憑み、今日までも

迎の船や見ゆるかと

幾度上る磯の山』、

『固より人なき島なれば

命を維ぐ術も無み

初は山に攀ぢ上り

硫黄といふを採り來り

筑紫に通ふ商人と

僅かの粟に代へてしも

今は力も竭きたれば

又せむ術も絶え果てつ』、

『晴れたる日には濱に出で、言葉も知らぬ島人にひたふる請ひて魚を得つ、汐干の時は磯に下りて貝を漁りつ、あるは又荒布を引きつ漸くにこの年月は送りしも夕は知らぬ露の身ぞ』、

『あゝ由なき事を、何かせむ今は止めなむ、さるにても曩にはさせる文も、なく今又汝が下るにも傳ひし言は無かりしかば、朝な夕なに首惕べて都の音信待つものを無情人の心哉』。

忍び〳〵し有王も
今は涙に咽びつゝ
『未だ仔細を語らねば
そは理の御恨み
彼の時君の八條に
向はせられし其後に
武夫数多寄せ來り
殘れる人を縛めつ、

『上げつ、下しつ拷問ひ
果ては捕へつ、又斬りつ
其時在りし御族は
皆悉く討なされ
御息所の只一人
幼き君を抱かれて
鞍馬路深く逃れさす
思へばあはれ身にぞ泌む』。

僧都はいとゞ眉を昂げ
『我にも他かで族まで
憂目を見する相國の
心の中のうらめしさ』
有王聲も絶々に
『御跡を慕ひ折々は
鞍馬の奥に赴きて
御心慰めまつりしか』

『幼き君の行く度に
やよ有王よ我具して
鬼界とやらむ呼ぶ島に
渡れよ疾くと宣ひし
御聲は耳に殘れるを
春風寒き二月に
疱とやらむ病にて
玉の姿は消え給ふ』

『花を告ぐなる山里の
使は馬に鞍置きて
鞍馬の山のうす櫻
今をさかりと咲く春も
只旦暮に君を佗び
幼き人を思ひ出で
御息所のひたふるに
憂世を嘲ち在せしが』、

『積る思に得堪えでや
病の床に就かれしを
彌生の初果敢なくも
遂に歿り在しぬ』、
僧都は空を打ち仰ぎ
『あゝ定めなき現世に
如何なる前世の定めぞも
うれたき人の現世や』。

涙を拂ひ有王は

『おぞき涙に思はずも要の事を忘れたれ』、

髪解きて取り出す

文字優しげの女文

二度三度押し直し

僧都に之を捧げつゝ

『都の音信偲びませ』。

第六章　汐烟

月吹く風に松影の

頻りに動く庵の中

僧都は文を取り上げて

月の光にすかし見つ

『あはれ懐かし有王よ

これ見よ文字の美しさ』、

つれな、心な、浮雲の

又立ちかくす月の面』。

有王更に語り繼ぎ
『都の樣は秋の野を
野分の過ぎし如くにて
哀ならぬは無き中に
奈良に忍びて姨君に
育まれます姫のみは、
最と美しう生ひ立たれ
雨帶ぶ花にや譬ふべき』、

『花咲く春も垂れこめて
只に佗びてぞ在りけるを
彌生の半訪ひまつり
此文受けて下りしか
海の上にて船人に
あはや衣ともろともに
掠められむとせしかども
辛くもかくは隱し來つ』。

月また晴れて遠千鳥
風のまに〳〵聞ゆなり、
僧都は急ぎ讀み行けば
今有王の陳べけるとと
事違はずも書かれたる
奥には更に書き添へて、
『二人の人は歸りしを
など父上は後れつる

あはれ高きも卑きも
世にある甲斐の無きものは
何か女に如くべきぞ、
我若し男子ならむには
八重の潮路を漕ぎ分けて
在せる島に訪ひ下り
御心休めむ術もあるべきに
おぞきは女の身にしあれ、

偲ぶ心を汲まれなば
この有王を御伴にて
急ぎ上らせ給ひてよ』、
『有王伴に上れとや
これ、これを見よ有王よ
この子の文のはかなさよ
汝を伴にて歸れとや
其心無の恨めしさ』、

『若し我が心に任せなば
などこの島に憂きふしの
三年の秋は送るべき、
思ひも分けて徒らに
書き越す心のはかなさや
情も知るべき年なるに
かくも心の淺くては
爭で人には見ゆべき』。

焼野をあさる夕雉子
空に子を呼ぶ夜の鶴
闇にもあらぬ心もて
子を思ふ道に迷ふなる
親の心の今更に
深くも思ひ知られたる
都の母を思ひ出て
ふりさけ見れば月澄みつ。

僧都は文をさし置きつ
『我この島に着きしより
月日の立つも知らざれば
只自ら花の咲き
葉の落つる見て年を知り
月の満ち月の虧くるを眺めては
卯月皐月と数へつゝ
こゝに三年を過しつれ』

『今指折りて數ふれば
今年は六つの思ひ子も
早先だちて失せけるか
我八條に向ふ時
俱に具してと慕ひしを
嫗て歸らむたらちねと
門邊に出でて待ち居よと
云ひ慰めて出でにしか』

『夫も昨日と思ひしに
今は界を異にして
幼き者の唯一人
冥路の旅に迷ふらむ
あれを限りと知りたらば
よく顔も見てけむを
つれなき父と思ふらむ
何れの空に迷ふらむ』

『妹背の契、親子の縁、
現世のみの業ならじ
世を先だちし者とても
如何に佗びてやありぬらむ
今一度と今日までも
懸けし望は絶えはてつ
尙永らへて何かせむ
いて後追はむ黄泉の道』。

『御心弱き我君や
夫れ冬去れば春來り
悲み誌きて幸到る
今世の上を見渡せば
さしも榮えし相國の
運命も今は傾きて
矢叫高く青嵐
四方の山より吹き起り』、

『都の空のたゞずまひ
雲の徂徠も只ならず
天地こゝに革るは
思ふに近き中ならむ、
花また匂ふ來む春の
其束の間を待ち敢へで
など我君のかくはしも
御心弱き、我君や』。

僧都は頭打ふりて
『一度絶えし玉の緒は
繋ぎ止むべき由もなし
我が玉の緒は絶えたるを
尚存らへて何かせむ、
思へば夢の浮世なれ
再來む春に咲く花も
やがては又も散らむのみ』、

『唯生き残る姫にのみ
心苦しくは思へども
世の習ひともあきらめて
歎きつゝもや過すらむ、
左のみ存らへ汝にのみ
憂見せてむつれなかり
今は何をか思ひ置かむ
ひたに浄土を急ぐべし』。

口に日毎の糧を断ち
心に彌陀の號を唱へ
維摩の松の花の中
唯往生を祈りける、
茲に指折り數ふれば
有王島に着きしより
二十日あまりの曉に
朝の露と消えにしか。

空しき骸に取り縋り
仰ぎつ俯しつ有王の
只に涙を絞りしも
『死出の御伴に向ふべき
命を少時永らへて
亡き跡吊ひ參らせむ』、
大海原に日は落ちて
都の空は黄昏れつ。

松の庵を改めず
茶毘の煙となし果てつ、
紀念を固く首にかけ
又うき船に身を寄せば
彼の目になれし磯山も
今は漸くへだゝりて
見えつ隠れつ汐煙
立ち添ふ波の間より。

八重の潮路をはり

月下の賦上

月光皎たり　月光皎たり
清輝水の如く　天心に澄み
流華烟の如く　江山に充つ

月光皎たり　月光皎たり
誰家の童子　落梅を飛ばす
望郷の遊子　羈衣を濡ほす

月光皎たり　月光皎たり

笛聲風に入つて翠巒響え

欸乃波に碎けて清江流る

月光皎たり　月光皎たり

欸乃落梅風に去つて消し

江山寂寞月只澄めり。

紅葉落

第一章

首途

萬象枯す秋風は

今若松に襲ひ來つ

梧桐しきりに地に墜ちて

斜暉冷じく城に滿つ

仰げば過雁二三點

あゝ四疆の守今如何に

其忠誠は遮られ
其眞情は誤られ
濃霧を排し天日の
光を仰ぐ由もなく
天下を擧る大軍は
國の四疆を壓したり

事茲に至る今は只

國を擧りて應ぜんのみ
朱雀、青龍、精鋭は
西南二方の疆に出で
玄武、稀老鎗執つて
亦東方の急に趨く

壯老擧りて疆に在り
この城門を如何にせむ
乃ち藩校生徒より

少年隊は撰ばれぬ
年齢十六又十七
名も香ばしき白虎隊

一百餘人悉く
これ紅顔の美少年
窄袖短袴刀を佩き
白襷十字銃を帶び
素懷半は遂げ得しと

練武をさ〳〵怠らず

家嚴は西に創を負ひ
次兄は北に陣歿す
飛報頻りに非を傳ふ
四疆の守今如何に
一口守り失せんか
萬事に茲に休まんとす

よし好敵の寄せもせば
膳羞何を酬いてん
日來名を得し寶刀の
其味ひを以てせん
午鐘は鳴りぬ諸共に
いざ城庭に射的せん
城池を馳る雲急に
塘松渡る風疾し

望樓遠く見渡せば
暮靄を曳いて羽騎來る
東口はしも破れしか
土湯、中山、將た暮成
今は猶豫ふ時ならじ
書を國老に上り
出陣再び願はん
卿書を草せ、我入りて

直ちに之を呈せん
聞け彼の聲は何事ぞ
幕成の險は破れたり
石筵口は破れたり
大軍明日は長驅して
城下の砦を衝かんとす
社稷の安危存亡は
只旦夕に迫つたり

病者は起てり、狂者は喚べり
老婦は寶刀取り出でて
之を孫兒に帶せしめ
娘子は眉尖腋にして
既に家門の外に在り
萬家の籬天を焮く
曉雨蕭々窓を打ち

喧囂の夜は明けんとす
命令今や下らんと
待ちし一夜は明けにけり
母姉弟妹を顧みて
又新感の胸に湧く

忽ち飛价馳せ到り
城中よりの書を傳ふ
戎装各自遺却なく

登城午時を契せよと
出陣なり、出陣なり
喜び給へ母上よ

出陣、何ぞ遅かりし
汝記せずや鬼神と
高麗人にまで知られたる
汝が大祖の功勳を
年尚ほ汝は若しとも

喧囂の夜は明けんとす
命令今や下らんと
待ちし一夜は明けにけり
母姉弟妹を顧みて
又新感の胸に湧く

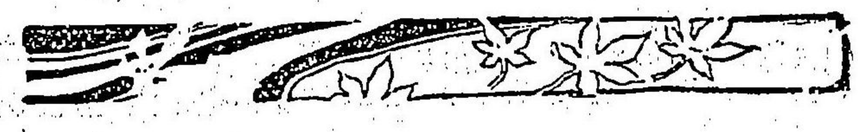
忽ち飛价馳せ到り
城中よりの書を傳ふ
戎装各自遺却なく

登城午時を契せよと
出陣なり、出陣なり
喜び給へ母上よ

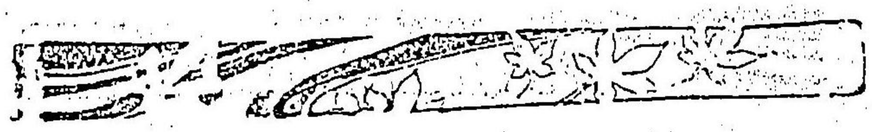
出陣、何ぞ遅かりし
汝記せずや鬼神と
高麗人にまて知られたる
汝が大祖の功勲を
年尚ほ汝は若しとも

記せよ、我家の盛名を
新衣は成りて此所に在り
昨夜汝が夢の間に
倉皇縫ひて今終べつ
いざこれ穿けよ、これ着けよ
こは神薬ぞ、こは神符
ゆめおろそかにな思ひそ

兄は過る日陣殁し
父亦重き創を負ひ
祖父も安危は測られず
今重寶のこの刀を
汝が首途に贈りてん
誓つて耻を留めざれ
雨は愈よ降りしきり
走せ交ふ人馬喧し



装成つて立上れば
集合喇叭聞ゆなり
一首を急ぎ認めて
母は其子の訣とす
老僕折りしも馳せ歸り
曩に戰況探察に
石筵まで向ひしが
敵は暮成を打破り



破竹の勢は一すぢに
猪苗代にと馳せ向ふ
暮成を固めし大殿は
無殘飛彈に斃れさす
御遺骸は取りあへず
麓の村に藏め置き
城下の樣は如何にやと
夜を籠めて今立ち歸る

祖父上までも……
今は猶豫ふ時ならず
いざ御暇と馳せ出る
老母は聲を勵まして
母も任りとは思ふなよ
家門に影を見送りつ

第二章　奮戰

大江決せり、濁浪湧けり
城内今や混擾す
この濁浪を支へずば
社稷の亡を如何にせん
壯老擧げて疆に在り
この濁浪を奈何にせん
猪苗代亦陷れり
戸口守り危しと

羽騎交々に非を報ず
直ちに行いて奔流を
中途に拒ぎ止むべく
白虎隊は命受けぬ

日來の希望遂げ得たり
偉功を樹つる今日に在りと
勇躍欣舞登城し
彼の城庭に屯せり

昨賞觀の花の下
今落葉頻りなり

喇叭一聲鳴り響き
一隊三十有七人
隊伍肅々東門を
猛雨を衝いて進發す
紅顏更に朱を潮し
意氣先づ敵の勢を呑む

突過家門を顧れば
老母は門に倚れり
我在りとしも思ふなの
御言葉いかで忘るべき
疾驅街路を東すれば
幼兒も走り且倒る
東騁數里險を踏み

瀧澤山に達すれば
巨礮頻りに耳を打つ
今交戰は半なり
峻坂直下敵兵に
目に物見せん愉快や
戸ノ口原頭只硝雲
砲聲叫喚是百雷
本隊何處、彼所、彼所

我隊左翼、胸壁爲せ
進退俱、死生俱
彈藥殫くまで、いざ

十六橋の險要を
奪ひし凱歌地を震ひ
川村隊の先鋒を
過らしめじと馳せ續く
西兵陸續、又陸續

忽ち原頭林となる

飛何かある、寡何かある
我は衝くのみ、只衝くのみ
巨礮頻りに相應じ
短銃既に相迫る
山鳴り湖鳴り人叫び
僵屍累々丘を爲す

社稷の存亡この擧に在り
祖宗の名譽何ぞ墮さん
敵の中堅直ちに衝け
丘上旗見ゆ拔け、本營
赭毛の指揮者斬れ、隊長
衝け衝け直ちに雌雄を決せん
年少、されど氣鋭なり
彈は驟雨と降る中を

只一線に幕進し
敵の中堅衝かんとす
氣は鋭、されどあはれ〳〵
見る間に枕屍狼藉す
或は松樹の陰に踞し
或は野石を楯となし
茲を必死と抗戰す
日來鍛へし其技の

徽は今ぞ顯れて
皆悉く的中す

暮雲羃々湖を鎖し
黑風白雨原を罩む
屈竟こゝに空渠あり
潛みて少時銃冷せ
未だ彈あり何かあらん
與は之より湧かんとす

敵の一隊湖を渡り
今笹山に上陸し
我が右側を襲はんと
鬨聞高く殺到す
腹背今は敵を受く
隊を分つに勢寡なり
先づ右側の敵を衝け

衝け、衝け、敵は寡勢なり
敵は寡勢ぞ何かあらん
壓迫湖水に擠せ
命捧げし武士の
龜鑑を示すこの時ぞ
横馳直ちに之に當り
銃火頻りに相酬ゆ
敵は援兵繼ぎ到り

我は傷き且つ疲る
氣は銃なれどいつしかに
退けられぬ原遠く
或は右より左より
潮と寄する大軍は
今原頭に充ち滿てり
我隊半亡滅し
援軍固より望なし

大勢はやも定るか

否々運は天に在り
何ぞ衆寡に依るべけん
この刀摧け、この銃裂け
この腕挫け、この脚折れ
而して後に止まんのみ
何ぞ衆寡によるべけん

弾丸殞きぬ、日は落ちぬ
短兵直ちに衝き入りて
最後の雌雄決せん
心を茲に一決し
白刃揮ひ一齊に
雄叫なして衝て入る

よし蟷螂の斧とても
龍車を摧く我を見よ

白虎の神の守ります
變通自在の我を見よ
喊聲、爲めに地は震ひ
劍閃、爲めに闇は劈く

第三章　義殉

奮闘苦闘努めしも
戰、遂に破れたり
刀を杖ぎ、足を曳き

古松の下に退きて
創痍を裹む二重三重
藥を含む七八度

我事茲に終れるか
死生誓ひし我友の
半は既に先逝ちて
殘れる我は創を負ひ
再び起たん由もなし

嗚呼我事は終れるか

黒風渡る雲間より

折しも漏るゝ星一つ

隊士齊しく仰見つ

銃あり、未だ裂けもせず

刀あり、未だ折れもせじ

再び起たん、いで起たん

風淅瀝と吹至り

再び聞こゆ鬨の聲

敵は城下に向ひたり

今は猶豫ふ時ならず

盡きし力を揮ひ起し

いざ後追はん諸共に

一人遮ん言ひけらく

我等傷き且つ餓ぬ

再び破れ破られて
笑を敵に買はんよりし
如かじ臣義を完うし
命を茲に終へんには、
左あれ記せずや我友よ
死はこれ輕く義は重し
我城陷り、我君殉す
後潔く義を秉りて

社稷と共に亡びんも
未だ遲しとなすべきや
間道城に歸らんと
衆議は茲に決したり
雲間に冴ゆる天つ星
影を辿りて分け登る
山嶺谷に徹して
落葉かしきりに面を打つ

雲又閉ぢて星も消え
四方は如法闇の中
或は蔦羅にまつろはれ
或は朽株に躓き
互に險を警めて
摸索山路を越えんとす
道失せるに非るか

曉近く覺ゆれど
尙雞犬の聲もせず
饑ゑぬ疲れぬ同じくは
斃るゝまでや走りてん
荆棘何ぞ峻岨何ぞ
天明纔に道を得て
瀧澤山下に達すれば
敵は早くも越え行きて

尚殿軍は嶺に在り
残兵在りと認めけん
直ちに我に發砲す

敵は早くも險を越え
後殿は我を認めたり
如かず路頭を轉ぜんに
乃ち長洞を潛行し
出れば此所ぞ飯盛山

朝霧籠を鎖したり
先づ遠喊の聲を聞く
眸を放てばあはれ
敵は城下に滿ち充ちて
礮聲轟き硝烟湧く
外廓今は敵を受く
城に歸らん途絶えつ

倏ち城市に火起り
烟炎天を燃かんとす
鶴城如何に眸を張れば
今や猛火に包まれて
五重の天守杳冥と
烟の裡に見ゆるのみ
あはや社稷は亡びたり
我事茲に終りたり

如何に天命なればとて
天下に比無き名城の
只一朝にうつろひて
烟の塵と消えんとは
不忠の臣、力は竭きて斃れたり
願はくは君萬秋に榮えませ
不孝の子、戰破れ先立てり
願はくは父母忘恩を赦しませ

十有六人南向し
瞑目流涕久うす

巨礮頻りに轟きて
烟焰更に漲れり
あゝ君は如何に
あゝ父母は如何に
君に殉する今
父母に後れじ疾く

天風渡る松の下
圓座を爲して袒す
純素の衫衣血に染みて
三點四點將た五點
楠氏の烈に遠く耻づ
只是れ心比せんのみ
或は辭世を再吟し

或は正氣を高誦す
天容地態革り
松聲蟲語樂を爲す
この大塊に枕して
悠々華胥に遊ばんか

生きては共に奮鬪し
大軍爲めにたぢろげり
死しては共に獄廳に

いて閻王を懲しん
一人玉膚の美少年
笑語と共に先づ仆る

續いて十五、十六人
皆悉く刃に伏す
あゝこれ明治戊辰の年
八月二十有三日
西風荒む飯盛山

紅葉落つる頻りなり

第四章　追懐

春風秋雨四十年
いつか苔むす墳墓に
花はは〳〵散りかゝる
春光老いし飯盛の
舊址に來り吊へば
あゝ萬感の胸に湧く

この盤根に踞しにけん
低回叩撫幾匝り
この谿水に掬しけん
俯臨凝睇やゝ少時
在りし昔を偲べども
松は語らず、水言はず
滄浪の水、滄浪の水
清めらば纓を濯はん

滄浪の水、滄浪の水
濁らば足を洗はん
誰が誦む一曲ぞ
花の木蔭に聞ゆなる。

聲は漸く近きて
老翁一人立ち出でぬ
小櫻一枝折り添へし
薪を輕く肩に懸け

弓にやつくる一本の
梓を右手に杖けり

落花を仰ぎ老翁は
直きを枉げぬ武士の
誠の道は失せけるか
あゝいつの世か古の
直なる道に梓弓
引きや返さん世の人を

翁よ少時杖止めて
在りし昔を語りてよ
我は都の邊りより
義殉の跡を尋ねんと
遙々此所に來る者
願はくは翁よ早く語りてよ

翁は輕く點頭きて

やをら薪を傍に置き
半忘れし憂事を
再び思ひ起さんは
由なき業に似たれども
いでや委しく語りてん

彼の參天の松の下
實に十六士自刃の地
綠髮紅顏血に塗れ

眦眼切齒尚ほ死せず
其壯烈は宛らに
今尚ほ眼に殘るなり

其時一人老媼の
其子の行方尋ねんと
この山指して登りしが
枕屍の内に一人の
尚ほ息あるを認め出て

乃ち之を救ひたり
潺湲遶るこの川に
實に十六士は掬したり
刃を抑へ這ひ下り
最期の渴を愈さんと
隻手を伸べて水に入れ
其儘逝きし者もあり

日經て一人の手弱女は
跡を慕ひて此所に來つ
血染の衣を認め出で
これや我が兄の紀念ぞと
涙乍らに濯ぎしも
同じ流のこの川ぞ
南は田畝打續き
菜花一抹黄を曳く

黄霞の末を指して
翁は更に肩を昂げ
一叢かすむ彼の松は
あゝこれ鶴城の址なれや
憶ひ起す
埠堞角樓蜒として
白堊三層松を抽き
彤甍碧瓦燦として

天閣五重雲に入る
仰ぐ御影は高かりし

一朝城は陥りて
主公は出でて恭順す
其夜忍びて城に入り
光風月下血を染めて
憾を壁に遺したる
あゝ其姫もありにしか

孤忠は遂に容れられず
眞情遂に誤られ
天に愬へ地に號び
誠を握く由もなく
秋風一下忽ちに
大樹盡く葉落す
後物換り星移り

今は殘墟に狐狸隱れ
月黑橋頭子規を聞く
あゝ嵐の花と諸共に
同じく我も散りたらば
この愁辱は見じものを
恨むる勿れ老翁よ
玄冬素雪に地え得てぞ
彼の馥郁の梅は咲け

翁も存らへ給へばぞ
國輝世界に揚れるを
謳ふを得るに非るか
翁は更に長嘆し
國輝世界に揚りたり
されども内を顧みよ
人の心に匂ひてし
誠の花は散り果て

世は風荒ぶ秋の野邊
國の春野を飾るべき
其若草は萎えて、
再び匂ふ色もなし
あゝ若し花に心あらば
曩に散りてし小櫻の
如何にうたてく思ふらん

紅葉落をはり

滄浪の歌幽かにも
落花の路を消えて行く
翁の影を見送りて
少時ゐむ木の下を
何に狂へる蝶二つ
添ひつ縺れつ舞ひ廻る。

明治四十年八月九日印刷
明治四十年八月十二日發行

定價 金廿五錢
郵税 一册四錢

著作權發行者 馬場直美
京市本郷區三組町廿三番地
印刷者 遠藤銓吉
東京市京橋區南崎町二丁目廿五番地
印刷所 六合舍
東京市京橋區南崎町二丁目廿五番地
發行所 翰香館
東京市本所區小泉町三番地

不許複製

大賣捌所

翰香堂 上田屋 至誠堂 勉强堂
文林堂 赤心社 栗原書店

馬場峰月作月窓雜詩續編

第二編 傾城 近刊

一笑すれば一城を傾け再笑すれば二國を傾くる者是れ古の傾城なり百笑千笑尚ほ足らず身を以て捧ぐる者是れ當今の傾城なり、笑を賣り情を鬻ぐ傾城は固より憐むべしと雖も之を弄して得々たる無腸子は更に大に憐むべし、此編收むる所、『新曲武藏野』外二篇凡二千餘是れ悉く作者が紅涙の痕、謹て世の紳士淑女諸君に一本を呈す

第三編 幽韻 續刊

作者某深山に籠りて得たる『對蹠賦』『仰嶧吟』外數篇を收む、森嚴の氣自ら溢るゝを見む

第四編 春風 續刊

之を繙かば恍々として春風裡の人たるべし

以下八編續て刊行す

253
545